

研究タイトル：

オーストリアの教育制度における言語・民族問題－モラヴィア、ブルノ市を中心に



氏名： 京極 俊明 / KYOGOKU Toshiaki E-mail: kyogokut@toyota-ct.ac.jp

職名： 准教授 学位： 博士(歴史学)

所属学会・協会： 日本西洋史学会, 東欧史研究会, ハプスブルク史研究会

キーワード： 東欧近代史, チェコ, モラヴィア, 民族問題

技術相談
提供可能技術：
・オーストリア＝ハンガリー二重帝国における、言語・民族問題
・モラヴィアの歴史

研究内容： オーストリアの教育制度における言語・民族問題－モラヴィア、ブルノ市を中心に

本研究は、19世紀・20世紀のオーストリア＝ハンガリー二重帝国期の教育における言語・民族問題を研究対象とし、なかでももっぱらモラヴィア(現在のチェコ東部)の教育制度における言語・民族問題に焦点を当てるものである。このモラヴィアという地域は、ドイツ系住民とチェコ系住民がモザイク状に混ざり合って居住する傾向の強い地域で、それだけに民族間関係も複雑な形をとった。また当時の二重帝国の領邦のなかでも、社会民主党の「ブリュン綱領」、民族自治協定「モラヴィア・アウスグラウヒ」をはじめとする、民族和解への数多くの「実験」が行われており、民族問題研究にあたって、大変興味深い地域であると言える。

モラヴィアの言語・民族問題研究を通じて、まず二重帝国の領邦・地域の単位でも民族問題解決の試みが行われ、かつ実績を上げていたことが示される。こうした研究の積み重ねにより、ハプスブルク帝国史を領邦・地域の側から読み解いていくことが可能となる。

他方で、チェコ国民形成の歴史は、これまでプラハを中心にして語られてきた。文芸復興運動に始まるチェコ国民運動の中心がプラハであり、中心的な役割を果たしたことは確かである。しかしながら、ボヘミア、モラヴィア、シレジアの各地域で、チェコ国民運動が均等に進展したわけではない。特にモラヴィアでは、ボヘミアよりもドイツ系住民の力が強く、かつ帝都ウィーンに近かったため、チェコ国民運動の発展は、ボヘミアに比べて遅れたものとなった。こうした力関係の相違から、モラヴィアのチェコ国民運動は、ボヘミアよりも穏健で宥和的な性格を持っていた。またフスやジシュカをシンボルとしたボヘミアとは異なり、モラヴィアではカトリックの影響力が強かった。モラヴィアで初期の文芸復興運動を担ったのは、カトリックの聖職者たちであった。また議会でもドイツ系勢力に対抗すべく、モラヴィアのチェコ系政党は、カトリック勢力と協力関係を築いていた。モラヴィアのチェコ国民運動は、以上のような独特な性格を持っていた。それゆえモラヴィアの研究を通じて、チェコ国民史に対して、周辺の側から別の像を提示し、より多面的な歴史像の構築することが可能となるのである。

なかでも教育制度に焦点をあてるのは、まず同時代の民族対立の中で、最も重視された課題の一つであったためである。現実はともかく、母語と異なる言語で教育を受けることにより、子どもの民族性の喪失が生じると論じられていた。ゆえに母語で教育を受ける機会を確保することが、民族の死活問題とみなされていた。また国民運動、特にモラヴィアのチェコ国民運動の主導者となったのは、教養市民層であった。中等・高等教育で、将来のエリートがいかなる教育を受けていたのかを明らかにすることは、国民運動の性格を把握する上でも不可欠な課題なのである。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	